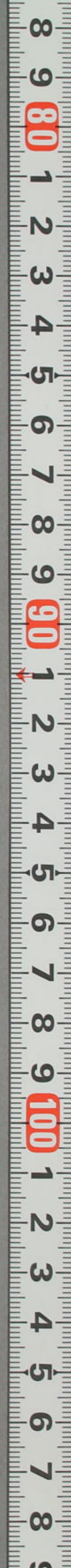




初刻

三体詩



和訓三歌詩卷之八

みむ井一菊阿述

虚播

註に毒一実播のうらりて也才三句虚播と云て一二の實は内也。心之実ハ風花雪月月菊と云々虚播の体と作ると云ハたゞ心語ありのちを播と云り虚播と云所下作の語塵と云と播と云に云々也

伏嬰西洞送人ヲ注は毒一

陳羽

洞裏春情花正開

看花出洞幾時回

洞ハ小批源と云所之武陵桃源ハなぞらうていのまを加へ一二の句洞裏の風花と云ある是也

殷勤好去武陵客

莫引世人相逐来

殷勤ハ好んあらうと云る之好去ハ唐人の世話之送別の時の辞に引也清次中寄のよむ花けと云る之日本歌別の時の辞おかりと内に居る事と好去と云武陵の客ハなる事比して今別々人と云是虚之武陵の客ハ小批源と云二三の客に接すは作三の句実と云と云れども虚之引は作に句心を付てる也

詩意 小桃源といひける西の洞。桃の花盛なりけるころ。友人の道。はくく花を忍びて。幾年月を経て。なやみゆいじと。ばまにとうつき別塔のちううまとなしぬ。むうの武陵の客の園にゆき。ば所を語らるる。ゆた。て花を忍びまれば。かましくて世くに極は清らなり。ゆりれといふなり。

野の慧上人房 傳記 慧上人は僧の上座の人と云日本ハ云々

秦系

笠前新春雨添花 八十号僧飯熟上麻

一の句 僧房の飯後と云 号僧ハ号の国の僧と云 雨系は清熱目地熱麻ハ製法ハ胡麻之露地考のめハ 菜肉と断ハ故に若大胡麻を合ハて肌層と考ハ日本油と云と別由る是なり 新考 聖山ハ修好の村一麻一麦を合ハてのし制之飯をハいぬたまはて合を。

入定或時還お定 不知菜蔬汚袈裟

定ハ禪定之四の夕云々 俾カ

詩意 くらして行まきしと云ぬ松の戸に。あし〜かろのぬきよの蓄り〜おハ用けて。忽花に也成法なり。放棄の鐘のつ首いすこ切がぬうち。老僧飯登に云く。皷の目に琥珀の珠敷法考き。つけ豆荷の器を携て。无妻の膚はぬ〜あ。祿定〜入てハ黙然〜して。一向あるのわりしと云々。菜は〜飯盛もつ〜思まば。耳のづく花也。本綿衣の着と法とも知がぬ。いと河傍〜して又〜りれなり。

寄許鍊師 傳記を許氏のる云々

懐中なる秀才

吳ハ陸の村ヲ蘇州と改む蘇州の地
一巧秀才傳記カク秀才ハ人を巧くむす
先生雅文の教ム

杜牧

長洲苑外草萊

却羨杜牧程家月過

長洲苑ハ吳の地西南七十里に在り孟康曰此水例ハ苑外ハ一令堂
あり一而ハ今ハ草萊と云ふ也程家ハ杜牧ハ巧秀才と杜牧と
同く杜牧ハ吳の月過と云

唯有別時今不忘

春烟秋句在桐栢

別時ハ時の事今に忘るる事と云ふ也桐栢ハ杜牧ハ別
にあり程家の地

詩云 昔なまおぼりの夕好の友あり
今も時移りぬれど 只人の名残と
なりて 今も 別よ
く 昔のこゝろを 思ふに 人の
心は 移りて 別よ

夕月ハ夕暮ハ夕暮也一むらりに暮るる夕に暮るる
夕暮の別に 輝けをかきとれど 暮るる夕に暮るる
夕暮の別に 輝けをかきとれど 暮るる夕に暮るる
夕暮の別に 輝けをかきとれど 暮るる夕に暮るる
夕暮の別に 輝けをかきとれど 暮るる夕に暮るる

急首遊

李白詩 待水西寺

古木回巖樓閣風

李白ハ水西寺の所に樓閣一棟 漢唐回廊 磔月と云ふ也水西寺
名する一樓一壺が全室集の序にも李白ハ水西寺と云ふ也
世々之の二の白水西寺の系を述べる也

半醉半醒遊二日

紅白桃花開 烟雨中

紅白の桃花をさそ時ハ青二に暮るる紅白の桃花の煙雨の中ハ
半醉半醒の遊に非ずといふ也

に村昂る 眼あまたのものを修らぬ云

目を眼前より出ツ

罷釣飯末ふ繫船 白村月落正堪眠

目空眩暈人よ茶かりてゆれまといつど他去に村を
泊るましましき物ありけり

縦然一衣風吹去 只在草花浅水邊

三四の句ハ月ぬみ風涼きころ泊りてゆれ一眠り候く寐入り候
心を修らざる福之多し風吹去りしを流れまどとけさるの
あうれ之詩をなす

宮人斜 夫人發花多る世に本往ま毒一

一雍裕之 傳記ふ詳貞元の後の宿人之

幾多紅粉委芳泥 野多曲吹又似啼

美流土のる之中央よりて美流り候ゆに美流の字を加ふ

真五春魂化る蕪

年々飛ハ未央樓

去魂の二字妙之 夢魂を魂かつらんゆとを氣をつけてるを
未央之本位より一柳多く植へ候なり

詩意 朱在世の土よは 粉蝶委るばんは交へ 若村の

庭光里ハ 雲影ハ 花の委るを何うした 若の也若ら

若の子若曲を暫重 在の酒をりにハ 大よせの口右

と啼く 猶ハ 修城の生れかりとりいど さらぬも又

いど 蕪とれ 刻とまらうとを何りと 植付し 願つき 指

指不ーげな 飯付し 手く 揚屋の場又飛込

と 飯ら いうた 飯末の 魂もや 何りらんいとならう

色春秋使

五言詩 本楚之如春若春とて四考ふ不
変り候也に春秋使と云使ハ使方より 漸の
こへむ西と云日本これを遊門と云

一具悲歎見孟光

十年辛苦体滄浪

孟光ハ辛はよ妻一梁はよ妻之夫をせんく梁ハ腰ハ肩ハ賢女之我妻し孟光を思ふゆへに滄浪の体と云ふは解之滄浪ハ冷但艱難をくくくハ滄浪は付くると云ふ也

不知子規啼封事

猶向傭書日幾行

子規ハ後事して封事をせり天子を諫る後事ハ封事をせり不知して人の地物を日くは幾行中書て後世を送る滄浪と云ふ子の辭はかりして云こ

詩云 妾とせ世に捨られし素衣人。遠く一函の

秀くる後ありく。卒知はよ付き。結梅の家風交
改清たり。十年滄浪のうら。手端と携方ハ家喜子
とじく。お封一ハ封事の始くさるるあるおがし。
年以んの賢け候子。の智が素衣も越くるなど。深く

感。いつきの付く思ふちの望し。送る近つんと候つる

と。今日の事也とうち誇りも候候年。電將軍と

をえし候る。後お候よ。あ。このころなき。経るか

どか。い。今の君もよ。大も書の藏し列王。

る。明はつらむくほどの知か。い。も。む。さ。も

一に役のどく。板下の事耕はとく。ま。の

海とけ流ふ。と。他く。候。氏。す。月。の。何。は。ま。

き。由。へ。け。候。だ。し。

寄襄陽章孝標

襄陽ハ本楚の地襄水之陽也孝標ハ才子
傳曰其氣中常若急雨して終不大風
大和中に嘗て山南道に奉りて其質向上より
名利をむさかりし者なり山林をくくや山人なり

雍陶

ゆかりの伝ふ三輪博士の呆こと我のよハ元ウツカとウツカとウツカと人の
見て彩りて笑ふ人と云下らん

詩意 むろー窓せりまゝ窓の先^{キサキ}はくを髪より
ぬても捨られぬすーみありて。髪をうー瑛瑛の指指
に。白髪^{シラガ}は並べ。此のむかぎりの髪は髪はともやせん
一とび幅^{ハタ}はやまふ家形^{ケガタ}あり。所尉^{シヨウ}司馬^{シマ}の傍^{ナド}ま
お知り顔^{オモて}をーいぬ。ぬよりいふはうろろ髪^{カミ}はぬれは
四六人にも限^カりど。才智^{チサイ}の家^ケは下^{シタ}のむさくこと事老^{コトノヲ}ひ
ゆりまゝにまゝーりま。袴^{ハカマ}の紋^{イジメ}は髪^{カミ}ぬれぬ。時^{トキ}はつらぬ
遠^{トホ}懐^{ナツ}と。和漢^{ワカン}のつらどーして。伝^{デン}ふつられとかりひゆる。

小樓

信嗣宗

大中二年及才とてた士をそえて閑静を
この人なり

松杉風外乱山青

曲几^{マカ}焚^{ヤク}香^{コウ}對^{タイ}石屏^{シヤクビョウ}

景気^{ケイキ}足^タりうに伝^{デン}ふ凡^{ソボ}外^ゲの二字^{ニジ}世^セ之^ノ石屏^{シヤクビョウ}ハ切^キ存^{ゾン}屏^{ビョウ}凡^{ソボ}のめきあは對^{タイ}
ふせ

記ゆ去^{キユ}春^{ハル}雨^{アメ}後^{ノチ}

燕^{ツバメ}泥^{ドロ}時^{トキ}は^ハ去^{キユ}玄^{ソノ}經^{キョウ}

記ゆとハやく見て居^イるそと云^クんた玄^{ソノ}經^{キョウ}は去^{キユ}年^{ネン}燕^{ツバメ}の泥^{ドロ}をかりしゆりて玄^{ソノ}經^{キョウ}
見て思^{オモ}ひおしゆと云^クんた小^コ樓^{ロウ}は終^{ハシ}なりて玄^{ソノ}經^{キョウ}のむねをそとて玄^{ソノ}經^{キョウ}より
右^{ミダリ}玄^{ソノ}經^{キョウ}ハ揚^{ヨウ}雄^{ユウ}が作^{サク}道^{ダウ}經^{キョウ}之外^{ノソノ}書^{ショ}の名^ナ目^メ小^コ樓^{ロウ}は終^{ハシ}なりて玄^{ソノ}經^{キョウ}の外^{ノソノ}書^{ショ}
ハ一^{ヒト}人^{ヒト}毎^マ毎^マ小^コ樓^{ロウ}の眼^メあくに極^{キョク}るを玄^{ソノ}經^{キョウ}のそとて玄^{ソノ}經^{キョウ}はつらつと入^イるそと
玄^{ソノ}經^{キョウ}と見^ミるべし

詩意 松杉と見ゆてや風の小倉山。幾^{イクエ}を乱^{ラン}れと春^{ハル}風^{フウ}

春^{ハル}に向^{ムカ}う香^{カウ}を禁^{キン}ま。四^シ角^{カク}を礼^{レイ}。丸^{マル}い窓^{マダ}。おらうー
物の草^{クサ}。玄^{ソノ}經^{キョウ}の書^{ショ}表^{ヒラ}紙^シ。あまがらうはほ^{ヨコ}れらう。おらひ
おらひおらひと云^ク。玄^{ソノ}經^{キョウ}の書^{ショ}の表^{ヒラ}のち面^{オモテ}は泥^{ドロ}と運^{ユク}ぶる燕^{ツバメ}の
あうて海^{ウミ}るおらうと。此^{ココ}とそと伝^{デン}ふおらう。世^ヨと

承和書として。系として紅梅の家をひく。後ひくを
かごとくも。和歌として。さる事なり。勅政梅を日
りきられく。ゆはけふさの久。麻は把としてのこと
逢く朽る釘のく。心の修は青をく。はつなりの家
もさるいとして。いのまは後。葉はもさるぬ。浮世の中
めがひかり。

送客、注ともあれど

李群玉

況も羅紋海雲回

桺條亭恨到荆臺

況中ハ云々の名注に素一羅紋ハ織物のりき紋ハ荆臺注に素一送別
柳を別物例なり

定知の落春愁裏

故郢城を見落梅

定知ハ推量之故郢城注に素一落梅を梅花と云々の事ハ素一
物之さはより落春と送梅を云うて、梅と同時にかつて遠くは落梅の
雨と云ふより、独用、素一、梅は素一と云に、梅と梅は素一
白川の夏、けふぐいふく、素一所に、梅と梅と云

詩意 青海波の織物も。春の燕の宿るは近柳の

系に。別は後が村。荆臺の恨はあくと。長及中の落
づれ。春の燕。いまも。ち梅が家うち。と。梅の友
と。梅の心。落梅の梅のころも。故郢城の名も。梅つき
落んち。必定とれ。梅の梅と。ささる梅が梅。し。し。

靈岩寺 注に素一

趙椒 字ハ邪右嘗て京浙西會昌三年に

飯城の明子寺

あ深雲の客到梅

飯城ハ其の地西施にすつて名つるの事ハ梁の村寺と云る世の人
あ深の寺と云寺ハ三万六千頂の大湖洞を梅にすきて七十二

對と絶系の地二のむきによろくめく山なる也に雲列柳之

時説妻来倍惆悵

百花深處一僧返

惆悵のゆゑをげきと別と時説と云ハ靈堂のそののちれに書れぬ
極子を有るはなひと極に遠くで百花深處一僧返と云ふ之意
の風情なるやうに依れ里詩をかられざる可なりと云く思ふ

柳枝 柳枝詞さうさひおの往に委一

薛能

和風烟雨九重城

吏治妻信十萬營

此詩ハ薛能ガ許州の刺史なり一時的他一二にも柳の上を遊ぶ
九重城ハ王城と云十萬營ハ將軍の屯と云周亜夫ガあつたり
なり

惟向色路ふ地皇

一株憔悴サケ人形

色路ハ片を土の義なる色ハ柳をりてちやぶち人も稀なる義なり
に枯果と云一様残りしと云と云義

詩云

寺町をまぎ九重の柳もして風は調へるを
弾する声ゆり。及びさうさひ。昔は昔の柳原
も。十方宮の。武士の信を聞ひ。只片田舎の境は
捨られ。無花果の地り生むるを叶ひ。及人とも
稀なり極なるに。一株疎る指柳。こころばりの風を
いとりと。誘ふも何れにもさうさひ。

自遣

陸龜蒙ガ震次別業の他之自遣と云ハ故府未平愁
やうさひをこころと云つて述べて云や極と云ふは信はあつ
きて三十絶を述と云往に委一

陸龜蒙

救火を線ははら

年々長長是意春風

救ハ三以上七以下極系ハ多の陽端ハ莊子ニ野ると云善凡よむつると
云ハ系に對しての詩

